

市 川 浩

研究課題 身体図式の象徴形式

発表誌・発行所 ①②〈私さがし〉と〈世界さがし〉(岩波書店)③現代詩手帖

表題 ①可能的世界への回路 ②芸術の現象学のために
③全体と断片

—— 身体図式の象徴形式については、体術、武術や、バレエ、ダンス、演劇など体を使うパフォーマンス一般はいうまでもなく、美術、音楽、建築、言語芸術やコスモロジーに至るまで広汎なかかわりを考えることができる。しかしそのかかわりは、直線的一義的なものではなく、あるずれないしへだたたりをもっている。それだけではない。それぞれのジャンルの象徴形式はその歴史をもち、その歴史にたいする自己批判性をもっている。その自己言及性そのものが、身体自身ないし身体図式そのもののもつ自己還帰性に根拠をもっている。そのかかわりを一挙に考えることはむずかしい。ジャンル毎に問題は同じではないからである。

ここでは論文①で人間存在自身のもつメタ構造をさぐり、芸術のもつメタ性や自己言及性をその上に基礎づけ

た。このさい感覚や感情や想像力や記憶や観念産出力を、人間のさまざまな能力として、ばらばらにとらえるのではなく＜感覚－運動図式＞として統合されたものとしてとらえ、それにもとづく身体図式を、宇宙（他者も含め）との発振－探索－受信の過程としてとらえた。

それだけではない。感覚－運動図式も単純なものではなく、知覚的側面と感情的側面をそなえている。ベルクソンの用語にしたがえば、前者は対象から私への、また私から対象への作用可能性の反射であり、後者は現実的作用（作用現実性）の吸収を示す側面である。しかもこの両者が、感覚に反作用し、感覚を複雑にすると同時に、多義的にし、豊かにする。

このような感覚は、生まれかけの行動へと方向づけられ、行動図式の傾向を左右する。それが行動へと実現するとき、現実化にともなって、それまで潜在的に含まれていた多義性は抑圧され、より一義的になる。論理的な一義性ではない。行動（非行動をも含めて）可能性のうち一つが選ばれることによって、他の可能性が抑圧あるいは抑止されるという意味で、より一義的になるのである。

これは共時的に考えた場合であるが、さらに過去の記憶と未来を含む（過去への想像というのもあるのだ）と想像が加わり、イメージ化して感覚に合体し、それを増幅する。このような複合体は、抽象化の方向へ向かうとき観念となり、また観念はイメージ化をとおして、生まれかけの運動の方向へと具象化する。

芸術作品はこうした複雑な感覚－運動過程のダイナミックスを、いわばその記号的な相関物、コレラティブを作りだすことによってメタ化する。大ざっぱに言えば、それが記号化の過程にはかならない。この意味では芸術

作品は、第一次的なレベルですでに一種の非現実化、メタ化を含んでいるのであり、作品自体にたいして二次的なメタ化、自己批判の内在化が起るのは不思議ではない。このコレラティブとしての作品は、実用的行動へと現実化する必要がないので、行動によって現実には抑圧されるさまざまな多義的な感情的知覚的な含意を可能性として含むことができる。

このような多数多様の可能性を含む世界とかかわりうる多数多様体としての身体を＜錯綜体＞と呼ぶ。錯綜体と世界との関係は、論文③でとり上げた「全体と断片」の問題へとつながる。断片は全体を分析してえられる部分ではなく、またホロニックな理論がしばしば想定する、「全体を写し出す部分」という意味での完全写像（解像度に差はあれ）でもない。これはもっとも抽象的なレベルでのコスモロジーともかかわるので、1989年度の研究でさらに考察を含めたい。

論文①では、②で追究した身体図式相互の共振共鳴同調関係を考察した。これは身体言語を中心とするノン・バーバル・コミュニケーション、体術やパフォーマンス芸術、さらに一見非行動的にみえる美術・建築・言語芸術の創造と理解にとっても、必須の重要性をもつ。感応ないし同調という概念を軸にして、感応を調査するためには、映像人類学が開発した映像分析や井村恒郎教授グループが開発したエレクトロニックシステムによる感応調査が不可欠であるが、今回は東洋美術学校デザイン科の協力をえて、4台のビデオカメラによる日本の体術の分解研究に手をつけたにとどまった。これは1989年度在外研究のさい、西欧の武術と日本の武術の比較研究をしている外国研究者との交流に用いる予定である。